The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞藤田保幸著『引用研究史論』
Author(s)	河野, 光将
Citation	語文. 2015, 104, p. 65-66
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70957
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹　介

藤田保幸著『引用研究史論』

河　野　光　将

藤田保幸著『引用研究史論』（以下、本書）は、引用研究をリードしてこられた藤田保幸氏のご専門である引用研究に関する二冊目の研究書であり、引用表現にかかわる上代から現在までの主要な研究を取り上げて論じたものである。

まずは本書の構成を目次によって示す。

序
第1章　引用研究史展望
第2章　近世以前の引用研究
　第一節　引用研究前史
　第二節　富士谷成章『あゆひ抄』の「と家」をめぐって
第3章　引用研究の黎明
　第一節　山田孝雄・松下大三郎の引用学説
　第二節　三上章の引用研究
　第三節　三上章の引用研究・再論―『構文の研究』の所説をめぐって―
第4章　現代の引用研究の展開
　第一節　奥津敬一郎の引用研究
　第二節　「語彙論的統語論」と引用研究
　第三節　遠藤裕子の話法論
　第四節　砂川有里子の「引用文の3つの類型」
　第五節　鎌田修の引用研究
　第六節　引用研究と「メタ言語」の概念
　第七節　日本語の「話法」研究と中園篤典の話法論
　第八節　中園篤典『発話行為的引用論の試み』について
第5章　藤田保幸の引用研究―自説の形成―
第6章　引用研究の世紀末
　第一節　松木正恵の所説について
　第二節　砂川有里子の話法論
　第三節　山口治彦の所説について
　第四節　引用研究の「今」をめぐって
結語
参考文献
〔1〕本書で言及したもの
〔2〕引用関係研究文献目録・補遺
あとがき
索引〔（1）事項索引・（2）語句索引・（3）人名索引・（4）書名（文献名）索引〕

さて、本書はタイトルが『引用研究史論』となっているとおり、単に研究史的事実について述べるにとどまらず、著者の立場からその問題点についても踏み込んで論じておられる。この点につい

ては著者自身が述べておられるように、本書は、前著『国語引用構文の研究』とセットで読むべきものである（なお、『国語引用構文の研究』については昨年度、和泉書院より重版が刊行されたことをお知らせしておく）。

また、ユニークなのは第5章において著者自身によって引用研究史における自説の位置付けについて述べておられる点で、自伝的記述も交えつつ、著者が自説を形成・発展させていく過程が示される。

個々の研究の学説史的意義とその問題点については、「第1章引用研究史展望」において簡潔にまとめておられるのでここで改めて述べることは控えたいと思うが、本書には「研究」に対する著者の真摯な向き合い方が窺えると同時に、現状に対する危惧が繰り返し述べられる。

研究にとってオリジナリティが重要であることは改めて言うまでもないことであるが、いたずらにそればかりを追い求めては、先学の研究がなしえた功績を無視してしまうことに陥りかねない。事実、第4・6章で取り上げられる研究の中には、先行研究が十分に継承されず、研究の水準としてはかえって後退していると思えるものすら存在する（具体的言及は差し控えるが、そもそもの出発点となる具体的言語事実の分析が不十分なものや、引用表現をどういった観点から考えるのかが明確でないものなども存在する）。

著者は、研究史を紐解きながらそうした研究の問題点を端的に指摘されるが、そこに見えるのは学問の「継承」と「発展」への質実な思いである。研究史を追うことは、研究の「発展」にとって一見迂遠な作業に思われるかもしれないが、本書は、その作業の大切さを改めて示している。

そうした点では、本書は引用研究を手掛ける者はもちろん、研究を志すすべての者が参照すべき書であり、研究への姿勢というものを虚心に考えるひとつの契機となろう。

（和泉書院、二〇一四年五月、四六七頁、一〇，〇〇〇円＋税）

（こうの・みつまさ　本学大学院博士後期課程）